



Title	文化の排除性と共有性 : 序にかえて
Author(s)	木村, 茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2012, 2011, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77372">https://hdl.handle.net/11094/77372</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 文化の排除性と共有性

—序にかえて—

木村 茂雄

## 1. はじめに

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科主催の「言語文化共同研究プロジェクト」のひとつとしてこの7年間進めてきた共同研究の報告書であり、そのシリーズの7巻目にあたる。この共同研究の基盤は、研究科の教員と大学院生をおもなメンバーとする定例の研究会で、私たちがPCFと呼びならわしている「ポストコロニアル・フォーメーションズ」研究会にある。

近現代のさまざまな文化の形成は、広い意味での近代植民地主義の投げかける長い影のなかで行われてきた。現代の「グローバル・カルチャー」や「移民文化」もその例外ではない。これらの多様な文化の形成について考察すること、また、これらの文化に対する私たちの視座や批評をつねに形成し直すこと、それが研究会の命名に込められた意図である。

この研究会には、言語文化研究科の修士生など、「非正規」のメンバーも参加し、その活動を充実させるのに大きく貢献している。毎年のことながら、この報告書はその最初の読者として、まずはこれらのメンバーに送り届けたいと思う。

## 2. 2011年度のPCF

PCFはほとんどの場合、論文の批評会という形をとっている。資料はポストコロニアル研究と呼べるものが多いが、細分化すれば、帝国主義論、植民地文化論、ポストコロニアル文化論、移民文化論、先住民文化論、グローバリゼーション論など多種多様である。これはおおむねメンバーの関心の多様性を反映しているといえる。ほぼ月1回のペースで、土曜日の午後を開くことが多い。基本的に2編の論文を取り上げ、担当者がその内容を紹介したり、その意義や問題点の指摘を行う。その後フリートークに入るが、論文を褒めそやすよりも、その欠点、盲点などがしばしば議論される。これは先行研究に対してあえて疑問を呈しながら、私たちの批評意識や批評の言葉を鍛えていく過程でもある。

以下に、2011年度のPCFの記録を残しておく。開催日、論文のタイトル、担当者の順に示す。

2011年

○5月7日(土)

1. Lazarus, Neil. "The Politics of Postcolonial Modernism," *Postcolonial Studies and Beyond* (2005) : 木村茂雄
2. ハーバーマス、ユルゲン『引き裂かれた西洋』、第八章「国際法の立憲化のチャンスはまだあるだろうか」(2004) : 村上八重子

○6月4日(土)

1. Said, Edward W. Chapter 4 "Beginning with a Text," *Beginnings: Intention and Method* (1975) : 伊勢芳夫
2. Singh, Amritjit and Peter Schmidt. "On the Borders Between U.S. Studies and Postcolonial Theory," *Postcolonial Theory and the United States: Race, Ethnicity, and Literature* (2000) : 松本ユキ

○7月2日(土)

『言語文化共同研究プロジェクト ポストコロニアル・フォーメーションズVI』(2011)  
(前年度の報告書の批評会) : 杉浦清文・中村未樹

○9月17日(土)

1. Chen, Kuan-Hsing. "Asia as Method: Overcoming the Present Conditions of Knowledge Production," *Asia as Method: Toward Deimperialization* (2010) : 加瀬佳代子
2. Reeve, H. "Baron Hübner's Trip round the World," *Edinburgh Review*, Vol. 138 (1873) : 花井晶子

○10月29日(土)

1. Brecher, Bob. "Complicity and modulation: how universities were made safe for the market," *Critical Quarterly*, vol. 47: 1-2 (2005); "Higher Education: Students at the Heart of the System," Presented to Parliament by the Secretary of State for Business, Innovation and Skills (June 2011) : 山田雄三
2. North, Michael. "Against the Standard: Linguistic Imitation, Racial Masquerade, and the Modernist Rebellion," *The Dialect of Modernism: Race, Language, and Twentieth-Century Literature* (1994) : 古東佐知子

○12月10日(土)

1. Hau'ofa, Epeli. "Our Sea of Islands"; "The Ocean in Us," *We Are the Ocean: Selected Works* (2008) : 小杉世
2. Venuti, Lawrence. "Globalization," *The Scandals of Translation: Towards an Ethics of Difference* (1998) : 歳岡冨香

**2012年**

○1月28日(土)

1. Williams, Raymond. "When Was Modernism?"; "Metropolitan Perceptions and Emergence of Modernism," *Politics of Modernism* (1989) : 木村茂雄

2. North, Michael. "Modernism's American Mask: The Stein-Picasso Collaboration," *The Dialect of Modernism: Race, Language, and Twentieth-Century Literature* (1994) : 依岡宏子

○3月3日(土)

1. Williams, Raymond. "The Politics of the Avant-Garde," *Politics of Modernism* (1989) : 村上八重子
2. ジャネット、トニー (河野真太郎他訳) 『失われた二〇世紀 (上)』、序「わたしたちが失った世界」(2011) : 稲垣健治

### 3. 文化の排除性と共通性、あるいはカリブの蛾の話

レイモンド・ウィリアムズが没する2年前の1986年、彼とエドワード・サイードとの対談が行われた。<sup>1</sup> 『田舎と都会』と『オリエンタリズム』に基づいた映画の上演後に行われたもので、2人への「共同インタビュー」に近いものかもしれない。そのような場にふさわしく、文化研究と政治との関わりや表象 (representations) の政治性など、両者の批評にとって核心的な話題がお互いへの敬意を込めつつ語られている。たとえばウィリアムズは、それぞれの研究対象(「イギリスの田舎」と「レバノンの混沌」)には距離があるものの、2人の基本的な方法にはある種の親和性 (congruity) があるという (178-79)。

かすかな不協和音が聞かれるのは、質問者が「共通の文化」(common culture) の理念の問題性を問うときだ。質問者は、この理念がマイノリティの声を周辺化してしまう可能性を指摘する。「共通に合わせろ」という命令になりはしないかというわけだ。これはウィリアムズの「共通の文化」のかなりの曲解といえるだろうが、ウィリアムズは辛抱強く、それは基本的にエリート文化に対して「拡大し参加する共通の文化」(extending and participating common culture) を主張するものだが、現実の文化の分断や葛藤を無視しようとする理念としても用いられ得ることを認める。そして、「コモン」から派生した「コミュニティ」の概念も、当時のサッチャー政権下において、競争主義的な個人主義に対する対抗概念となると同時に、「ナショナル・コミュニティ」の概念に横領されつつあることを指摘する (193-94)。一方のサイードは、「私が思うに文化とは、本質的に、協力や共同というよりも排除のための言葉として用いられてきた」と、やや性急と感ぜられる調子で述べる。これに対するウィリアムズの返答はなく、やや尻切れトンボの感を残して対談は終わっている (196)。

この「すれ違い」には、文化の権力性や階級的な分断に抗ってその共有性を唱えてきたウィリアムズと、西洋文化の排除性や支配線を批判し続けたサイード、その両者の文化概念の相違、あるいはその強調の違いが表わされていると、一応はいえるだろう。しかしこの強調のズレないしアンビヴァレンスは、ポストコロニアル文化の形成にとっても基本的な問題であるに違いない。たとえば、そのひとつの特徴的な試み、すなわち、ジーン・リ

<sup>1</sup> 没後出版のウィリアムズの本 *Politics of Modernism* (Verso, 1989) に、“Appendix: Media, Margins and Modernity”として収録されている。同書からの引用ページ数は以下本文中に示す。

ースの『サルガッソーの広い海』など、本国の文学正典を植民地的視点から書き換える実践は、端的に言って共有なのか、それとも（逆）排除なのか？

『サルガッソーの広い海』が書き換えた『ジェイン・エア』と、リースと同じくカリブ出身のマリーズ・コンデが書き換えた『嵐が丘』について、ウィリアムズは次のように述べたことがある。「批評の最終的な関心は2つの小説の違い、つまり、それぞれがいかに関本的に異なった方法を提示し、維持しているかに向けられるだろう。しかし最初に強調しなければならない決定的な点は、両者における感情の強度である」。<sup>2</sup> 「感情の強度」という一見単純なポイントは、サイドとの対話でも、19世紀イギリスの女性作家の特徴として強調されているが、それでは、2つの小説の違いはどこにあるのか？ ウィリアムズは、『ジェイン・エア』が根本的に一人称的（first-person）であるのに対し、『嵐が丘』は「多人称的」（multipersonal）であるという。そして、それは「方法」である前に「経験」の問題なのだと付け加える（69）。そこで彼が注目するのは、2つの小説における「欲望」（desire）の違いという点である。

私がいおうとしているのは、それは同じ欲望、あるいは同じ種類の欲望ではないということだ。この点が非常に難しいのは、感情という言葉はどちらの方向にも強く傾いていくからである。しかし私は、他者に対する欲望（*desire for another*）と他者における欲望（*desire in another*）、その2つを区別するよう試みたつもりだ・・・後者が優れているというわけではない・・・ただ、それこそが関係だという意味で、それは異なっているのだ。（70-71）

「他者に対する欲望」と「他者における欲望」、あるいは「他者を欲望すること」と「他者において欲望すること」。これはウィリアムズらしい（あるいは、ほとんどデリダ的な）簡略表現であり、その具体的な「内容」は、どちらかといえば私たちの想像に委ねられている。しかし『嵐が丘』の多人称性という彼のポイントも、単に語りの方方法だけでなく、自己と他者とのこのような関係、すなわち、他者に自己を感じて欲望する、あるいは感情を動かすという自他関係の経験ないビジョンを前提としていることは間違いないだろう。

ジーン・リースの『サルガッソーの広い海』が、『ジェイン・エア』で野蛮化・動物化された「狂女」バーサの視点からそれを書き換えた、一種の「対抗言説」であることはよく知られているので、ここでは少し違った角度からこの作品を振り返ってみたい。つまり、経験の共有性ないし集合性、あるいは共同の語りという点である。

この作品のアントワネットの経験が、彼女だけの単独の経験でないという観点は、作品中に少なくとも2度表現されている。まずは、彼女が「ロチェスター」のイギリスの屋敷で暮らす生活を想像するくだりである。

<sup>2</sup> Raymond Williams, *The English Novel: From Dickens to Lawrence* (London: Chatto & Windus, 1973), p. 60. 同書からの引用ページ数は以下本文中に示す。

私が住むことになる、寒くて私の場所ではない家を私は知っている。私が横たわるベッドには赤いカーテンがかかっている、はるか昔、私はそこに何度も寝たことがある。どのくらい遠い昔だろうか？私はそのベッドで私の最後の夢をみるのだ。<sup>3</sup>

「赤いカーテンのベッド」には多分、原作のジェインが子供のときに閉じ込められた「赤い部屋」のベッドが意識されているだろう。また、「そこに何度も寝たことがある」という一見不可解な言葉には、彼女と同じような状況に置かれてきた植民地の女性たちの集合的な経験が暗示されているといえる。

次に、「ロチェスター」のまったく異なる視点から見たアントワネットの「集合性」である。

間もなく彼女も、他の女たちの仲間入りをするだろう、秘密を知っているくせに、それを喋ろうとしない女たちだ・・・彼女たちはあんな風に歩き、話し、叫び、笑われたたら（自分か相手かを）殺そうとする。そう、あいつらは見張っておかなければならない。(103)

ここでステレオタイプ化されると同時に集団化された女性たちもまた、アントワネットのような植民地出身の女性たちに違いない。

いま、ロチェスターの「まったく異なる視点」といったが、しかし『サルガッソーの広い海』には、彼がカリブとアントワネットを理解し、いわば「他者において欲望する」ことができたかもしれない可能性も暗示されている。そのような意味でこの作品は、バーサの書き換えだけでなく、ロチェスターの書き換えでもあるのだ。ここでは彼とカリブの蛾という、大変小さなエピソードを紹介しておきたい。以下は『ジェイン・エア』の一場面である。

「ジェイン、こいつ (this fellow) を見てごらん」・・・

「翅を見てごらん」と彼はいった、「西インドの虫を思い出すな。イギリスではこんなに大きい鮮やかな蛾には滅多にお目にかかれないから。ほら、飛んで行った」<sup>4</sup>

間違いなく、ロチェスターのこの小さな「西インド」の記憶を書き換えたのが、次の引用である。ここでの「私」は「ロチェスター」、会話の相手がアントワネットである。

---

<sup>3</sup> Jean Rhys, *Wide Sargasso Sea*, A Norton Critical Edition (New York, 1999), p.67. 同書からの引用ページ数は以下本文中に示す。また、実際には無名の本作品のイギリス人は「ロチェスター」とカッコに入れ、原作のロチェスターと区別する。

<sup>4</sup> Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (Oxford World Classics, 1993), p.216.

最初は鳥かと思ったほど大きな蛾が蠟燭のひとつにぶつかり、火を消し、床に落ちた。「こいつは大きいね (big fellow)」と私はいった。

「ひどい傷？」

「傷ついたというより、目を回したみたいだ」

私はその美しい生物をハンカチに包んで拾い上げ、手摺の上に置いた。それはしばらく動かなかつたので、柔らかく鮮やかなその色合いや、入り組んだ翅の模様を、蠟燭の暗い明かりで見て取ることができた。優しくハンカチを振ると、それは飛び立っていった。

「無事だといいたが」と、私はいった。(48)

ここでは、原作のロチェスターが、カリブの自然に対して大変デリケートな感性をもった「ロチェスター」へと書き換えられている。この「ロチェスター」が、帝国主義的あるいはオリエンタリズム的な感情に色濃く染まっていることはたしかだが、その一方で、カリブの自然、そしてアントワネットが内包する「秘密」に強くに惹きつけられていることもたしかであり、その両方の感情に強く揺さぶられるこの「ロチェスター」は、少なくとも私には、原作のロチェスターよりもある意味で人間的な存在に感じられる。

リースはある手紙で、一遍の詩を書いたことが作品の構想を固める助けとなったと述べている。以下にその一節を引用する。ここでの語り手も「ロチェスター」である。

多分あゝのとき愛が微笑んで、  
海を渡る航路を私たちに示してくれたかもしれなかったのだ。  
そこは難破船が散乱する藻の海だと人はいう。  
そこに挑む者は少なく、そこから逃れる者はもっと少ないと。  
しかし微笑む愛に導かれた私たちなら、  
私たちだったら、この海を渡り、安全な港に辿り着き、  
甘くそして東の間の天国を見つけ、  
短い人生を共に生きることができたかもしれなかったのに。<sup>5</sup>

「私たち」は、原文ではイタリックで強調されている。完成された小説においても、このような経験の共有の可能性が仄めかされているからこそ、その後の不協和音がすさまじく、その破局が「私たち」にとってより悲劇的なものになるのだといえるだろう。

物語は、アントワネットが彼女の最後の夢、ロチェスターの屋敷に放火する夢からいったん覚めた後、召使いのグレイス・プールの目を盗んで、蠟燭を手に部屋を出て行くところで終わるが、その前に、グレイス・プールの短い語りが置かれている。

<sup>5</sup> Jean Rhys, *Letters 1931-1966* (Penguin Books, 1985), p. 246.

何よりも厚い壁。それが戦い疲れるまで戦ってきたすべてのものから、私たちを守ってくれる。だから私たちみんながここにいるのだろう、ミセス・エフもリアも私も。ただし、自分だけの闇のなかに生きている、あの娘だけは別だ。彼女はまだやる気をなくしていない、それだけは言える。(106)

原作では重要なセリフのないグレイス・プールに、屋敷の外の社会で戦い疲れた女性たち（「私たちみんな」）の共有体験を語る声が与えられていることも注目に値するが、ただし彼女は、アントワネットだけは「やる気」(spirit)をなくしていないという。最後はその言葉通りになるわけだが、その予告となる夢のなかで、アントワネットはまず、屋敷をさ迷う幽霊というよりも、その幽霊を恐れる原作のジェインに近い位置が与えられている。

ときどき左右を見て確かめたが、けっして後ろは振り返らなかった。この屋敷に住みついているとみんなが言う、あの女の幽霊を見たくはなかったから。(111)

そして彼女は、明らかにジェインの「赤い部屋」を連想させる部屋に入っていく。

赤いカーペットと赤いカーテンの大きな部屋だった。他はみんな白かった。私はソファに腰をおろしそれを眺めたが、部屋は祭壇のない教会のように、悲しく冷たく空しく思えた・・・その部屋で私は、突然とても惨めな気持ちに襲われた。(同)

彼女は蝋燭を倒し、この「赤い部屋」を炎上させるが、その直後、彼女は「幽霊」を目撃する。

私が幽霊を見たのは、そのときだ。吹流しのように髪をなびかせた女。彼女の顔は金箔の縁どりで囲まれていたが、私には彼女が誰か分かった。私は手にもっていた蝋燭を落とした。蝋燭はテーブル・クロス縁に燃え移り、炎が燃え立つのが見えた。(111-112)

鏡に映った彼女自身の姿に違いない「吹流しのように髪をなびかせた女」は、原作の屋敷炎上の際のバーサのイメージにも重なる。「ジェイン」としてのアントワネットから「バーサ」としての彼女への転換が行われているといってもいいが、しかしこの作品における「鏡像」のアンビヴァレンスを想起するなら、この鏡像にも、これら複数の自己と他者が二重三重に映し出されていると読んだ方が正しいだろう。アントワネットの経験には実際、これまで触れた点以外に、ジェインの経験と共通する要素が数多く書き込まれている。父を失い、母親はいないも同然の孤児的な状況、修道学校の経験（原作のヘレン・バーンズの代わりに、エレヌという友達も登場する）、その修道学校を「避難所」と感じるアントワネット、しかしそこから出て行った後のロチェスターとの運命的な出会い、等々である。

つまりこの作品には、間違いなく、アントワネットとジェインとの経験の共有性も暗示されているのだ。

以上のような観察から、やや大袈裟な結論を引き出すなら、アントワネットのようなポストコロニアル主体にとっての「他者」、さらにいうなら「ロチェスター」のような植民者にとっての「他者」も、完全な排除や完全な共有の対象とはなり得ないことが分かる。同様に、さまざまなポストコロニアル文化も、ウィリアムズのいう「他者に対して」と「他者において」、その間の緊張や揺れ動きのなかで形成されてきたものといえるだろう。そのような文化形成の実相を、テキストや状況の「細部」において可能なかぎり正確に捉えていくこと、それが PCF において引き続き追究して行かなければならない課題のひとつであるように思われる。

#### 4. ポストコロニアル・フォーメーションズ VII

このような課題は、今後もしばらくは展開し続けるにちがいないグローバル状況において、その重要性をますます深めていくに違いない。越境や移動という現象が大きな潮流となりつつある現代世界において、文化の排除性と共有性、あるいはその差異性と共通性を2項対立ではなく、生産的なせめぎ合いとして捉え、「共通の文化」とはいわないまでも、共通の問題を突き詰めていくことが私たちには求められている。そしてこの視点は、私たちが過去の歴史を振り返るときにも、ひとつの定点になるはずだ。文化の排除性と共有性との葛藤は、場所や時代によってその表われ方は異なれ、少なくとも近代植民地の出発の時点から起こってきたことに違いないからだ。

本報告書でも、花井晶子（「若き明治天皇に謁見したヨーロッパ貴族」）と伊勢芳夫（「日本語による東アジアのマッピング」）は、それぞれ明治初期および大正期から昭和初期にかけての文書を読み解き、前者は1人のヨーロッパ貴族の「オリエンタリズム」を、後者は「アジア」を論じる日本人思想家たちの微妙な立ち位置について論じている。村上八重子（「ラフィク・シャミと〈移動のドイツ語文学〉(2)」）と松本ユキ（「アメリカローマインド」）は、それぞれシリア出身のドイツ語作家とインド系の英語作家を題材に、現代世界における「移動」や「コスモポリタニズム」の意味を問う。さらに、中村未樹（「エステート、少年犯罪、そしてメディア」）は、現代イギリスのジャマイカ系劇作家を対象に、小杉世（「オセアニアにおける演劇とコミュニティ」）は、ニュージーランド、フィジー、ヴァヌアツの演劇（パフォーマンス）を通して、ポストコロニアル社会としての現代イギリス社会や、オセアニアにおけるポストコロニアル・コミュニティ形成の実相に迫る。井内千沙（「19世紀後半ブリュッセルにおけるフランデレン文化の振興」）は、あるひとつの劇場の設立という再び歴史的な視点から、ベルギーの2言語状況を振り返る。

以上、さまざまな「ポストコロニアル・フォーメーションズ」に対する私たちの取り組みに、読者諸氏の忌憚のないコメントをいただくことができれば幸いである。